Osaka University Knowledge Archive

Title	自閉症スペクトラム障害の受身性に関する研究
Author(s)	松本, 拓真
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54018
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　松本　拓真　　）	
論文題名	自閉症スペクトラム障害の受身性に関する研究

論文内容の要旨

本研究は自閉症スペクトラム障害を抱える人の受身性の特質を明らかにすることを目的としている。自閉症スペクトラム障害は社会性の障害・コミュニケーションの障害・想像力の障害を中心とする幼児期に発症する発達障害であり，人と関わることができない，空気が読めないなどというイメージが強い。Wing & Gloud（1979）の大規模疫学調査の中で社会相互作用の３分類のうちの1つに「受身グループ」が提唱され，他者から言われることに従順な子が3割弱はいることが確認されてきた。しかし，これまで受身グループの子どもや成人は問題行動が少なく，適応が良好だとか考えられてきた。私は自閉症スペクトラム障害の受身性により苦悩を感じている本人と家族がいることを仮説として，その苦悩の特質を見出すことを目的に研究を行った。

本研究は2部に分かれて構成されている。第1部は自閉症スペクトラム障害の受身性の基礎的検討であり，第1章から第3章までで構成されている。第1章は，自閉症スペクトラム障害の受身性に関する文献レビューを行った。受身性は適応の良さとして軽視される傾向があったが，「指示待ち」を始め，青年期以降のうつ・カタトニアなどの精神疾患は，受身性が深刻化した問題である可能性が考えられた。そして，受身性は状況の理解（見通し）の問題や知的な能力などの単一の要因に帰することが困難であり，また受身的な状況を好んで選択しているわけではないことが明らかになった。ただ，研究自体が少なく，青年期以前に焦点を当てたものはほとんど見当たらなかった。そのため，思春期以前の子どもの受身性について具体的に明らかにすることが必要だと考えられた。

第2章は，自閉症スペクトラム障害を抱える子どもを持ち，子どもの受身性について意識をしている親11名を対象としたインタビュー調査によって，受身性の具体的な現れを示した。データを修正版グラウンデッドセオリーアプローチにより分析した結果，幼少期の受身性に関しては能力的な制限を親が補おうとする側面が強いようだったが，その後は【意志か社会性かの揺れ動き】という独特な葛藤状態に陥ることが受身性の固定化に強く関連することが示唆された。特に【やるけどやらされてる感】の状態が見られ，周囲から求められる行動ができるようになったために受身的になることが自閉症スペクトラム障害に独自な過程である可能性があると考えられた。そこには本人が動機に基づいて行動していると感じられるだけの自己感がない問題が考えられた。

その結果を発展，拡張させるため，第3章では自閉症スペクトラム障害の受身性尺度PASASを作成し，対象となる診断を受けた子どもを持つ親101名の質問紙調査のデータの統計的分析を行った。PASASは「突出しない自己」「他者の言動への過剰意識と癒着」「支援への泥沼的な依存」の3下位尺度で構成されると考えられた。その該当率などから自閉症スペクトラム障害の子どもの親の中には受身性に苦悩を抱えている親が一定の割合でいることが確認された。3下位尺度には年齢による増加傾向に差があり，受身性が複数の水準であることも示唆された。また，性別，第一子かどうか，年齢などによって有意差が出ず，第2章の結果は広く見られる可能性が示唆された。

第1部の知見は親中心の研究であり，子どもの主観が検討されていないという制限があった。それを補完するため，第2部は自閉症スペクトラム障害の受身性の臨床的把握を主眼に私が経験した心理療法事例をもとに検討した。第4章では，事例研究，心理療法，質的研究，アタッチメント研究などの文献レビューを中心として，子どもの主観を知る上で心理療法の事例研究が研究法として持つ価値を示した。その中で受身性に関連が深い自己感の問題は，Hobson（1993）は「対人関係性」の持てなさとして自閉症スペクトラム障害を抱える子どもが心の志向性を持てない状態があることに注意を促したことと関連し，志向性の水準を吟味することが重要だと考えられた。

第5章では，実際に自閉症スペクトラム障害を抱える受身的な子どもの心理療法の事例を通して，精神分析的心理療法の発展がいかに自閉症スペクトラム障害の受身性を微細に見ていくための眼鏡を発達させてきたか，またその有用性も示した。自分と他者がもろい存在と感じることで主張をすることはおろか，好奇心を向けることも避けなければならなかったと考えられた。そのもろさには時間的連続性を持ちにくい障害特性の影響も考えられた。そして，第6章では，さらにその眼鏡の倍率を上げて，生後1か月から2歳までの乳児観察の事例を通して心と身体が分かれていない，志向性を失う領域にまで焦点を広げた。受身的な赤ちゃんが母親の積極的な身体的応答と出会うことで自身の身体的な動きの効力感を得ていくプロセスが見られた。第7章では，青年の心理療法事例を通して，自閉症スペクトラム障害を抱える受身的な人が青年期になったときにどのように問題を呈するのかを検討した。この事例では大学入学という環境の変化と性のうごめきを機に受身性が増悪し，最終的に一過性の精神病状態とも考えられるような様相を呈した。そこから心理療法を活用して，自分の身体を自分のものだと感じるようになっていくことで，自身の受身性に気付き，それを抱えながら生きていく能動性を示し始めた。

これらの臨床的な知見と第1部による知見を総合すると，ある人のある時点では必要な受身性も，発達の過程の中では不必要となっていくことがあり，同じ受身性でも不適切と考えられる場合もあることが示唆されてきた。ここで理解を明確にするために，本研究によって得られた受身性を3つの水準に分けることを提起した。このモデルは実際の人物の状態を把握し，その受身性が必要なのか脱却させるべきかを判断する際に物差しのように活用できる有益性がある。

本研究が現代までの精神分析的心理療法の発展を活かして，自閉症スペクトラム障害を抱える人の主観に迫ることで，自分の身体は必ずしも自分の動機に基づいて動かしているわけではないという水準にまで焦点を当てることができた。これは第6章で主に検討した状態であり，自分の身体のまとまりも体験できず簡単にバラバラになったように感じる状態で，養育者の身体的応答を含む積極的な働きかけによって身体的効力感として志向性を持てることが重要になる。これを第1水準の受身性として「まとまりを得るための受身」と呼んだ。

その後，次第に志向性を持ち，自分の動機によって行動するようになるが，実行機能の障害などもあり，自分から新たな行動に移ることが苦手な場合が多いため，第2章で得られた「やるけどやらされてる感」の状態になることがある。第5章で述べたように自閉症スペクトラム障害を抱える人は自分と他者がもろいと感じやすく，そのため信念や空想といった心の中の仮想的な空間である心的空間が持ちにくい。そこでは自分が何か行動を移すことは重大な結果をもたらす不安が喚起されるため，誰かの言動が自分の意志であるかのような状態で留まろうとする。これを第2水準の受身性と考え，「突き刺さないための受身」と呼んだ。

自分の動機によって行動しているという経験の蓄積から，自身の志向性への気付きが増すと同時に，対象が時間的連続性のあるものだと体験できるようになると，試行錯誤をすることが可能になる。自分自身がやりたいことへの気付きは，自分の身体が思った通りに動かせないという気付きにもつながるため，主観的には苦悩が増すこともある。さらに時期的に思春期青年期の社会的自立のプレッシャーが加われば，他者の提案に従おうとすることが出てくる。これを受身性の第3水準として「社会的自立のための受身」と呼んだ。誰かの提案を受け入れやすく，それを試してみようとする真面目さがあることは，経験を積みやすいため肯定的に働く場合が多いが，親など他者の言う通りに従うことで，自分で決断する不安から解放され，意志を失おうとする場合もあるだろう。

本研究によって，受身的な特徴を持つ自閉症スペクトラム障害を抱える人とその家族を支える方法の示唆も得られた。特にその人たちと中心的に関わる人（多くは母親）以外の存在が，その二者を支え，お互いが距離を開ける点で重要なことが示唆された。また，子どもが受身的であるからこそ生じる親の苦悩は理解されにくいことを他の家族や支援者が知っておく必要だと考えられた。さらに，受身性が子どもの現時点でのできなさなどに気付くことを麻痺させる側面も見いだされた。受身から脱却するときには本人も家族も悲嘆にくれるかもしれないが，現状に適切に気付き，次にどうすればよいかを考えることは希望につながる場合も多い。上述した3水準の受身性から示唆されるように，その時点で必要な受身性と不必要な受身性があることを考えれば，現状の子どもの状態を明確に把握できないことは，発達を大きく阻害するといえるだろう。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　　松本拓真　　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	老松克博
	副 査	教授	井村　修
	副 査	教授	金澤忠博

論文審査の結果の要旨

本研究は自閉症スペクトラム障害を抱える人の受身性の特質に対して発達心理学および臨床心理学の観点から検討を加えたものである。受身性は従来、むしろ肯定的な特性と見なされ看過されてきたが、今回の研究は、その問題をはらむ側面についても焦点を当てた点で画期的な試みと言える。各章の知見を通して「まとまりを得るための受身」「突き刺さないための受身」「社会的自立のための受身」という３水準の受身性が導き出され、同じ受身でもその時々の子どもの状態によっては肯定的にも否定的にも捉えられることが説得力のあるかたちで記述されている。

本研究は２部、７章から成る。受身性という抽象度の高い概念で捉えられる状態には相当な広がりがあるため、第１章では広範な文献のレビューによって整理を行っている。これにより、指示待ち・うつ・カタトニアなど、これまでは独立して検討されてきた症状が、受身性という通底する特徴の多様な現れ方として理解しうることを指摘している。その意義は、思春期以後に発症する精神疾患の予兆をそれ以前の時期の受身性のなかに見出せる可能性を示したことにあり、今後の発展が期待される。

第２章ではインタビュー・データに対する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた質的研究を行い、第３章では「自閉症スペクトラム障害の受身性尺度」（PASAS）の作成、およびこの尺度を用いた質問紙調査と統計的分析を行って、自閉症スペクトラム障害を抱える人の思春期・青年期に至るまでの受身性の現れを多角的に検討している。このインタビュー調査の結果、幼少期の受身性は能力的な限界を親が補おうとする側面が強いが，その後は「やるけどやらされてる感」に代表されるように、むしろできるがゆえに受身的になっていく、という独自の特徴が抽出されたことはとりわけ興味深い。周囲から見て適切な行動ができていることが、必ずしも本人の自信や主体感につながらないということは重要な知見である。また、PASASを用いた質問紙調査では、受身性のより一般的な傾向が詳らかにされ、じつは一定の割合で子どもの受身性に悩む親が存在することが明らかとなった。

第２部では、心理療法が行われた事例の詳細なプロセスが提示され、検討が加えられている。とくに第５章の事例および第７章の事例では、自閉症スペクトラム障害の子どもや青年自身とその家族に受身性がもたらす苦悩とそれに対する有効な治療的関わりが具体的に記述されている。そして、彼らの自己感にまつわる困難を、人の言動に通常備わっているはずの基本的特徴の一つである、志向性（ある対象への方向性）の水準と関連させて検討している。心理療法では従来、自分の行動の隠れた意味に関する気付きが重視されてきたが、ここでの検討から、自閉症スペクトラム障害における受身性は、自分の行動の意味どころか、自分の行動であるという気付きそのものが失われた事態であることが示唆された。この点だけをとっても、本研究はオリジナリティに富む野心的な探求と言える。第６章では、タヴィストック式乳児観察法にもとづく健常乳児の観察により、身体の動きにまとまりが乏しい最早期の発達水準における親への受身的な反応とそこからの変化のプロセスを検討している。以前から自閉症スペクトラム障害の特徴と最早期の発達のプロセスとの関連が指摘されてきたが、ここで、受身性に関しても例外でない可能性が示唆された。

以上、自閉症スペクトラム障害の受身性という特徴を量的および質的に多角的に検討した本論文は、未踏の領域に光を当てた学術面での貢献にとどまらず、有効な支援の方法の提案といった応用的な貢献にも資することが高く評価され、博士（人間科学）の学位授与に値するものと判定された。